

2017年1月29日

福音書からのメッセージ

悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。

(マタイによる福音書5章4節)

今日の福音書は、山上の説教と呼ばれる箇所最初の部分です。今日はその中でも特に、「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる」という言葉に心を留めたいと思います。

先日ある青年がこんなことを言っていました。「何で悲しいことが幸せになるんですか。悲しいのに幸せだって、ありえない」。確かにそうだと思います。わたしたちは悲しい状態にいるのは嫌です。だから「悲しむ人々は、幸いである」と言われても、なかなかピンとこないのではないのでしょうか。

ところがここでいう「悲しむ」とは、アクシデントや感情の起伏の中で起こる一時的なものとは少し違います。この言葉をきちんと訳すと、「悲しみ続ける」となります。ずっとその状態のままにいる、悲しいままにいるのです。

たとえば言うなら、泥沼です。昔、映画などで人が底なし沼に落ちていくシーンがありました。もがいても、もがいても、まったく浮き上がることができない。何とか首だけが出たような状態で、必死に助けを求める。悲しむ人々とは、悲しみという泥沼の中にどんどん沈み続けていく人のことです。いつまでも抜け出すことのできない悲しみの中に居続けるのです。

この悲しみの最たるものは、神さまから離れてしまっていることです。わたしたちは、何度でも神さまに背を向けてしまいま



す。神さまの手を離し、正しい人間になろうとしてもそれ

ができない現実を知ります。

しかしイエス様は、わたしたちのその姿を見て、宣言されます。「幸いなるかな、あなたたち悲しむ人々よ」と。耳を疑う言葉です。そんなはずはない、そう思っても仕方のない言葉です。でもイエス様は確かに言われます。

イエス様の目に映ったのは、自分たちが罪の中にいるということを知り、悲しみながら、神さまに何とかしてほしいと叫ぶ人々でした。そしてその中には、わたしたちの姿もあるのです。

神さまの力によらなければ生きていけない、神さまの慰めがないと歩いていけない。そのどうしようもない状況に悲しみの涙を流す人々を、神さまは必ず慰めてくださる。そうイエス様は力強く宣言されたのです。

これがわたしたちに与えられた希望です。わたしたちを悲しみの泥沼の中から引き上げてくださるイエス様に、この身を委ねましょう。イエス様はわたしたち一人ひとりの手を、しっかりと握りしめてくださいます。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>